

第111話<骨削っても>の要約と参考資料

第111話<骨削っても>の要約

朝鮮半島から土呂久に渡ってきた達本ハルさんは、貧しさゆえに、戦前は亜ヒ酸製造、戦後は焼き畑をして7人の子どもを育てました。辛かった思い出話の中で、特に強調したのは土呂久の人たちへの感謝の気持ち。「骨削っても恩返しはできません」と結びました。

第111話<骨削っても>の参考資料

111-1 徳村さん一家

佐藤アヤさんの話（1976年11月18日聴取）

徳村に子どもがおった。アサ子、スギ子、モツタイ、もう1人。嫁はおクワさんというが、それと別れて、弟の嫁といっしょになった。おクワさんは延岡に行った。鉾山の長屋がまだできんとき、川のすぐ上に小屋があって、徳村はそこにおった。鉾山がやまってから、貢さんのおるところに移った。衣類売りしよらしたが、たった今死なすごと、咳しよらした。やっぱり亜ヒ酸の大将やったけ。徳村やんは延岡へんに行って死なしたんじゃなかったの。あとの嫁さんと、夜男、昼男という人ら4、5人づれで来たことがある。2年前、福市さんが入院しとるとき、墓参りに来た。

佐藤福市さんの話（1978年8月6日聴取）

*第96話と重複

徳村は「達本成徳」という名で通っていた。徳村は日本で付けた名前。本妻（クワ）のおられるところは焼き窯に出よった。亜砒の精製をするころはハルさんといっしょになった。おクワさんは、子どもといっとき延岡におって、朝鮮に帰っていった。ハルさんと徳村さんは昭和28年ごろ土呂久を出て、徳村は延岡で死んだ。ハルさんには子どもがおったが、岐阜県に朝鮮の村がある。そっちで、子どもたちは太った。昭和43年に乗用車2台で家内中来たことがある。昼男は子どもを連れてきた。ヒロ子、マサエも来た。夜男は来なかった。墓に参った。長石でできた子（「ナカオ」という）が2つか3つのとき死んで、樋の口の上の墓にかかるとる。

徳村は亜ヒ酸のあと、他の鉾山に出た。山師関係の仕事をやった。なにせ、力が強かった。大きい体で。アンチン山で（助さんがやらせた）炭焼きをするとき、「ここ（長石）を貸してくれ」。ここからアンチン山に炭焼きに通って、この上でヤボ作をして、終戦後は、トーモロコシなんか作って闇商売をするわけたい。ヤボにタバコ植えたり、7年くらいここにおった。

ハルさんは今、岐阜で仕立屋をしよるとある。端切れをここ（長石）やら樋の口

(助さんの世話になった) に送ってきよった。徳村もハルさんもえらいな咳をしょった。徳村の咳は長石に聞こえるくらい、いつまでも咳しょった。顔は亜砒焼くころ負けていたが、だいぶたって、自然に皮膚の色は薄くなる。

佐藤福市さんの話 (1980年3月21日聴取)

*第96話と重複

徳村さんたちは昭和27年ごろ土呂久を出られたとやから、ナカオが死んだのは26年ごろやなかったかの。4つか5つくらい。変わった病気じゃったが、なんじゃったかの。樋の口の上にかっちよる。夜男とナカオは長石の上で生まれた。小さいときから背負ったり、連れちいってヤボ作をしょった。一郎は勝美とあい年、昭和12年生。夜男さんは学校1年に出るからと言って、延岡に下った。昼男は1年か2年、岩戸小に出た。

佐藤トネさんの話 (1980年3月22日聴取)

食糧難の時代だよ。長石の上に小屋を作って住んどった。部落の人は、「朝鮮、朝鮮」いうて、軽蔑する傾向があったわの。勝が人間好しで、人の世話好きで、ハルさんが頼ってくるわけたい。うちへんに、よう来よったわ。そしたら、野菜やったり、米やったりしょった。恩を感じて、田植えの手伝いに来よった。子どもは何人もおるんで、むぞぎがる人を頼っていくわけたい。娘にミヨ子ちおった。その人が田植えとか農家の仕事の加勢によ来よった。17, 18歳くらい。徳村さんはヤボ作、炭焼き。いちばん最後は、延岡に行ってカルイ商い。一郎というのが、延岡で生薬つくるところに勤めちよった。ハルさんは岐阜に行ってから、衣類の商いをしょった。そのとき、長石とうちに衣類を送ってきよった。

111-2 土呂久に来たハルさん

佐藤貢さんの話 (1978年12月2日聴取)

大正4年生まれで、私はハルさんといっしょ。この人が土呂久に来たのは、25歳のころ。先に来とった婿さんを追って、長女を連れてきたということだった。「すごいべっぴんが登ってくる」と評判になった。白い着物着て登ってくる。自分の名前を「朱〇〇」というんですよ。ハルさんの本名は、朱が苗字。娘が「ショ・チョッスイ」、日本名は「ミホ」。長男坊主は「チョッペン」。

佐藤一二三さんの話 (1980年7月26日聴取)

ハルさんは19~20歳で朝鮮から土呂久へ来た。ピンク色した服着て、白いふわっとしたスカート。ものすごくきれいだった。ところが、ここ出るとき、顔は「もがさ面」。徳村さんの奥さんのクワの弟金山の嫁さんだった。

佐藤ツルエさんの話（1978年11月19日聴取）

ハルさんはすらっとして美人だった。朝鮮人は葬式の時、泣いて泣いて大声で泣く。ナカオ君が死んだとき、「ナカオが土の中にいけられる」ち、泣き叫んだ。

111-3 達本ハルさんの一生

達本ハルさんの話（1978年11月7日、8日；加納栄町2丁目のアパートで）

14歳で嫁に行き、19歳で子どもが生まれて、日本に来たのはそのあと。釜山の近くの東萊（とうらい、トンネエ）で生まれた。大正4年かね？ いつ生まれたか知らん。父が早く死んだ。兄弟は多いが、東京に出て大震災で死んだ兄もいる。姉も日本に来たが、いまどうしているか不明。母と弟は（ハルさんが日本に来たころ）福岡にいて、戦後すぐ韓国に帰った。何年か前に韓国に戻ったとき、母は死に、弟は朝鮮戦争で死んだ。胸や足を撃たれて、弾を抜き出したが死亡した、と聞いた。弟の息子は郷里にいる。東萊町は町で、母は父の死後、働きに出ていた。畑があつて、そこを耕したりもした。

夫の「金山」が先に日本に渡って、しばらくして、忙しくなったからと私と長女を迎えに来た。それで、言葉も何もわからんのに土呂久に来た。土呂久の夜はまっくらで、怖くて怖くて、山の中で、夜は外に出られへんし。あそこ釜山の街灯はあつたが…。ハルというのは日本でつけられた名前。本名はちがう。朝鮮名をどんな字で書か、知らん。韓国から来たばかりで仕事に行きよつた。韓国の着物着て出たら、釜夫たちがじろじろ見るでしょう。反物を買ってきて、一晩で着物を縫うて着ていくと、それでもみんなじろじろ見る。前を合わせるだけだから、袖のところだけ縫うて、あとは前を合わせるだけにして着物を作つた。みんなが仕事をせんで見とるのが恥ずかしかつた。「めし食べ」「仕事せ」という言葉もわからん。仕事覚えるのがたいへんだつた。どういふものができるのかわからん。白い粉ができるのか、と思つたり、言われた通りにしただけ。地下足袋踏んで、窯の上でだんご握つてから、そこに並べて干す。窯が熱いから、乾いたのをテミに入れて降ろして焼く。全部、窯の上で仕事した。だんご作つたのは、背の低いおばあさん（名前は知らん）と2人くらい。背の低いおばあさんが仕事教えてくれて、だんご作りとできた製品を箱につめたりしよつたけどね。仕事場の近くの長屋に最初住んだ。長屋というて、小屋みたいな所。それから樋の口の上の社宅にいた。そのあと長石の墓場の前に小屋を借りた。金山も、ちょっと仕事（皿ヒ焼き）しました。皿ヒ焼いていて亡くなつた。病気はわからん。年齢もわからん。言葉は知らんし、ごはん炊いて食べて仕事行って、ごはん炊いて食べて寝る。それだけの生活。土呂久は、ほんとに山の中でびっくりした。一度、福岡の母と弟の所へ逃げていくつもりで、長女を負ぶつて、風呂敷さげて、昼間、ひとりで岩戸へ道を下つていたら、「岩

下」の前でつかまった。所長さんが手を広げて、「ハルさんどこへ行くのや」と止められた。金山と徳村がどうして知り合ったのか徳村がどこの村の出身か、知らない。徳村は東萊県の人じゃない。

金山と死に別れたあと、戦後、食糧のない時代に、成徳と結婚した。何も食べ物のないときに、食糧もらって世話になって一緒になった。お父さんがどこの出身か、いつから日本に来たのか知らない。外では仕事をするいい人だったが、家ではきびしかった。怖い人で、話ができんやった。しかし、子どもにはやさしかった。お父さんは炭焼くとき、5俵くらいかかえたらしい。力強くて丈夫でした。焼酎が好きで、酔うとすぐ物を投げる。酒飲むともめるでしょう。「飲むな」「飲む」で喧嘩になって、長石の進さんから止めてもらったり、助けてもらいました。お父さんは気がきついもんで追いかけてくるでしょう。……長石にはそのお礼もできないで。長石の山を広く借りて、炭焼きしながらヤボ作した。トイモとかトウキビとか白菜とか植えた。長石は山をさしてくれて、たいへん世話になりました。長石の裏のとがった山の竹山を全部根こそぎして。

お父さんは胃潰瘍で血を吐いて、岩戸の病院に入院して、輸血して一度は退院した。仕事ができなくなってから、段取りだけつけて、あとは私が働いた。長石の裏の急な斜面の山をヤボ作した。木の根を掘り起こしたり、手に鍬を持ち、鉋を持ちしたため、豆ができて、どんくのように手が腫れて苦勞した。韓国でも畑仕事をしたことはあったが、こんなにきつくはない。2つ3つの子を背負って、もう少し大きい子は、そばで遊ばせながら、畑仕事をした。忙しいときは、背から降ろしてしっこをさせる時間がない。背中の皮が、子どものしっこでただれてはげる。そこにまた、子どもがしっこするからしみる。おろして、しっこさせる余裕がない。お産したあとも、2日、3日休むだけで仕事に出る。お父さんが焼酎飲んでワーワーいうし。赤ん坊は生まれて1週間はへその緒が切れん。そんな子も背負って山仕事に連れて出た。へその緒がすれてねじれて、やわらかい赤ん坊の皮膚から血が出ることもあった。私が苦勞したのは、みんな子どもを大きくするため。子どもが学校行くので、夜、草履をつくって、それを踏んで行く。行きに、すり切れてしまい、帰りは裸足で帰ってくる。親指が岩や石にあたって、どんくの足の様に腫れて固くなって、冬は冷たいのでコチンコチンになって帰ってきた。土呂久の炭焼きでは生活できずに、一郎が小学校6年のとき、延岡に出た。延岡でも苦勞した。雨の日も風の日もリヤカーひいた。リヤカーひいて新聞とかボロとか集めて回って、夕方腹が減る。焼き芋を10円で3つくらい買って、食べながら歩いた。集めた新聞とかボロを売って、帰りに米や野菜をかうて帰った。料理して子どもに食わせる。一服してたばこを吸いながら、子どもたちが喜んで食べるのを、おいしくもないのにおいしそうに食べるのを見るのが、いちばん楽しかった。それが忘れられん。雨の日も風の日も雪の日も、リヤカーひいて、こんな苦勞は土呂久の人も知らんじやろう。延岡の家は、成徳さんが土呂久にいる間、人に貸していたものだ。(土呂久に行くまで成徳は延岡にいた?) 戦後、帰って見たところ、柱は宙に浮くような古い家で、シロアリ

が食いつくし、その上、屋根の雨漏りが激しい。屋根の上にあがっては、なんとかいう紙で雨漏りを防いだ。成徳さんは胃潰瘍で死んだ。公害とは思わない。町住んどっても、公害じゃなくても、肝臓が悪くなる人はおるし……。

岐阜にはいちばん上のお姉ちゃんが出てきたので、あとから、子ども2人と延岡から岐阜に出てきた。私は7人の子どもを育てて苦労した。長男の一郎は、延岡で夜間学校に出て、弁論大会にまで出場した。食事しながら、本を読んだり、新聞読んだり、よく勉強する子だった。苦労して、嫁さんもなかなか頭のいい人を岐阜でもらった。しっかりしている。昼男はいま岐阜に住んでいる。4つか5つまで長石におった。

人間ええとこ生まれんかったら苦労する。もってきた苦労やな。いっつも離れんで。子どもが何事もなく一生懸命生活しとるから、それは幸福やと思います。健康で無理せんよう働いてね。徳村が死んだあと、7人の子ども、特に一郎のことを考えて、名前を「達本」とした。私が国籍を変えた。いま子どもたちは誰一人よりつかない。子どもたちの家に行くと、洗濯物はたまり、茶碗も山と積まれている。私が一緒に暮らしておれば、と思う。しかし、そうもいかない。日本に友だちも少しいるが、ひとりぼっちだ。韓国に帰ろうか、と思っても、国籍を変えた以上、もう戻れない。旅行客として10日か15日行くだけだ。それに、親兄弟がいるわけでもなし……、どこに行っても一人だ。男の子3人はみな、日本の嫁をもろうた。私との間に、すき間風が吹く。むこうでは、親の面倒はみな子どもがみる。親の面倒をみない子は、部落の人がみんな集まって、「どうしてか」と意見する。それでも親を放っておくと、部落を追いだされる。日本のようなことはない。

土呂久の人は「よその国の者」といって、差別することは絶対なかった。土呂久では人の世話になった。そのあと延岡で苦しい生活しても、「明日金払うから野菜くれ」と言ったことはない。「長石」の進さん、福市さん、貢さん、「惣見」の勝さん、トネさん、「樋の口」の助さんにはたいへん世話になった。骨削っても恩返しはできません。貢さんは、私の子が亡くなったとき、ちゃんと風呂いらしてもろて、世話になりました。樋の口の墓には、その子と金山をいけてもらいました。子どもが死んで、こっちへん（日本）はまつるけど、わたしたちとこ（韓国）はまつりません。自分の子じゃから、まつるの当然なんでしょうけど、そういうことで、まつっていません。樋の口の墓参りに行って、金山の土をいただいてきました。ちょっと墓参りに行かれんもんですから、自分一人で考えて、土を少し……。韓国に帰って、墓を作ってやりたいのですが……。

助さんはやさしいで、いい方じゃった。長石の長男の勝美さんは、私の長男の一郎と同じ年か一つ違い。大きゅうなったでしょう。子どもが多いので、食べるものに困ったとき、惣見の勝さんやトネさんにも世話になりました。よう助けてもらいました。みんな涙出るような世話になりました。手紙書ききらんでしょうが。字を知らんから。

111-4 ハルさんを訪ねて

川原一之著「辺境の石文」P120～121

昭和の初期から 16 年の休山まで、土呂久鉦山で亜砒焼きに従事した朝鮮人は 3 人いた。日本名を「徳村」「金山」「大川」という。当時、岩戸周辺の村人は、「亜砒焼きは金取りはいいが若死にする」として、この職種を敬遠していた。鉦山は事情に疎い朝鮮人に目をつけて、危険な労働に使役したのである。亜砒に負けた 3 人は、顔の黒ずんだ黒皮症にかかり、激しい咳に苦しむ日々が続いたと語り継がれている。

ぼくは折あるごとに、朝鮮人亜砒焼き夫の消息を尋ねた。すでに 3 人とも鉦毒病にたおれ、土呂久の墓には「金山」と「徳村」さんの子供の骨が埋まっている、と知った。「大川」さんの遺子は北九州へ、「徳村」さんの遺族は中京へ移っていった、と聞いた。思いついて「徳村」夫人を、名古屋に近いある町に捜し当てたのは、今年（1978 年）の 11 月のことだ。夫人はハルさんといって、駅裏のアパートの奥まった 1 室に、ひっそりと暮らしていた。

2 日間にわたってハルさんは、朝鮮を離れてからの苦労話を聞かせてくれた。土呂久鉦山に来て何年か、言葉は通じず見よう見まねで砒鉦の粉をだんごに握った。子供を背負って逃げ出したが、見つかって連れ戻されたこともある。町に出たあとは大雨の日も大風の日も、食事抜きでリヤカー引いて廃品を集めた。女手一つで育てあげた 7 人の子は、結婚したあと母親を引き取ろうともしない。韓国の故郷を 40 年ぶりに訪ねたとき、会いたかった親兄弟は他界してしまっていた、という。

生活保護に支えられた孤独な生活に、在日朝鮮人の苦悩がにじんでいた。その背後に、軍国日本の植民地政策の深い傷跡が残されている。それを思うと、暗たんたる気分沈んでいくばかりだ。ただ救われたのは、ハルさんが繰り返し「土呂久の人たちに骨削っても恩返しできません」と語ったことだ。戦後の食糧難の時代に、土呂久の里人は朝鮮人一家に焼き畑用の山を貸し、食に困ったときは穀物を渡した。その思いやりが、身にしみてうれしかったのだろう。ハルさんは「町では差別を受けました。だけど土呂久の人は、絶対に差別しなかった」とも話した。